

須賀川市立小中一貫教育校「稲田学園」令和2年度学園だより

# とう 雲 稲 雲

第13号

令和2年10月13日発行

発行者：校長 小貴 崇明



## 〇いわせ地区小学生陸上競技交流大会

10月2日（金）に開催された「いわせ地区小学校陸上競技交流大会」では、稲田学園の6年生たちが練習の成果を発揮して、参加した競技でそれぞれに輝いていました。

うれしいことに、女子ジャベリックボール投げで西牧莉央さんが4位、女子走り高跳びで斎藤蘭さんが6位にそれぞれ入賞しました。大きな大会で緊張したと思いますが、参加した選手それぞれに、今回の経験を今後の学校生活に生かして行ってほしいと思います。

なお、本校PTA・体育文化後援会の役員の皆様には、大会当日に朝早くから鳥見山陸上競技場にテントを設営していただき、大会終了後にはすぐに撤収していただきました。さらには会場付近の路上駐車を防ぐ見回りもしてくださいました。本当にお世話になりました。



## 〇「秋華祭」&「運動会」～躍動する子どもたちにご期待ください！～

**10月17日（土）に秋華祭を開催します！** 校内文化祭「秋華祭」は、5年前から小中合同で開催してきましたが、コロナ対策として3密を防ぐために、中学生のみの発表会にしました。また、会場の第一体育館の入場者数制限のため、リモート中継により、発表生徒以外の保護者の皆様には、稲雲ホールにてお楽しみいただく予定です。何とか開催にこぎ着け、中学生たちの表現する今の稲田学園を感じていただければと思います。なお、保護者の皆様にはご参加いただけず心苦しいのですが、教育施設落成式典をあわせて開催いたします。

**10月24日（土）に運動会を開催します！** 秋華祭同様の理由で今年度の運動会につきましては、小学生のみの参加とし、実施競技を絞り込み午前中での開催といたします。元気な鼓笛演奏や楽しいチャンス走など、ご家族の皆様楽しんで応援いただけるよう児童たちは一生懸命練習しています。中学生が参加できないことは残念ですが、その分小学生に光り輝いてほしいと思っています。



※どちらもご来校いただく際は、体温測定、マスク着用、手指の消毒等にご協力ください。

## ○稲田地域学校保健委員会

10月7日（水）、市教委指導主事や保健師、そして稲田公民館長や稲田幼稚園教諭、児童クラブ館長、PTA 厚生部長の皆様をお迎えし、稲田地域学校保健委員会を開催いたしました。今回の会議では、今年度本校において顕著な児童生徒の「肥満傾向」について、参加者全員で課題を共有するとともに、学校や家庭、行政や地域社会など、それぞれの立場で対症療法的対応と未然防止の両面で具体的な食生活や運動等の対策を講じるよう情報発信していくことを確認いたしました。新型コロナウイルス感染症拡大防止対策により外出することが少なくなっているという状況も踏まえながら、今後も保健指導・食育等に力を入れていきたいと考えています。



## ○ノーメディアデーは実践できていますか？



10月2日（金）から8日（木）までを「家族の日」としていましたが、各ご家庭では具体的な実践はできたでしょうか？

本校では、7～9年生の定期テスト期間に合わせ、各家庭において電子的なメディア（PC やタブレット、ネットゲームや YouTube 等）を利用しない、または利用を抑える日を設け、家族そろって過ごす時間と子どもが学習に集中できる時間・環境を整える日として実施してきました。ご家庭の実態に合わせ、今回の期間以外でも自主的に「家族の日」を設定してみるのはいかがでしょうか。家族のコミュニケーションを増やし、よりよい生活習慣作りになればと今後も学校全体で取り組んで参ります。

## ○須賀川市中学生英検チャレンジ

2日（金）、5・6校時に「須賀川市中学生英検チャレンジ」による英語検定を実施しました。

「須賀川市中学生英検チャレンジ」は、昨年度から須賀川市教育委員会が実施する取組で、受検を希望する生徒の検定料を補助して英語検定の取得を促し、生徒の英語の力を高めることを目的としています。

稲田学園の7～9年生の全員の生徒は、5級から2級までそれぞれ取得をめざす級ごとに分かれて筆記試験やリスニングなどに一生懸命取り組んでいました。



### ★ことばのちから(13) 「楽しむ」と「楽をする」は違います

「楽しめな～い」と言って嘆いている人を見ると、本当に「楽しめない」のか、「楽(らく)をしたいのにできない」という意味なのかとすることがあります。高度なテクニックと輝かしい成績を残してきたアスリートが、勝負を決する大切な試合を前に「プレッシャーはありますが楽しみたいと思います」などと語ることがありますが、この人は「楽をして勝とう」などと思っていないことは明らかです。厳しい練習や悔しい敗戦、そして多くの挫折を乗り越えてきたからこそ、戦えることに「楽しみ」を感じることができるのではないのでしょうか。

子どもたちには、まわりの人の苦勞や心の痛みを感じ、決して自分だけ楽をしようとせず、仲間とともに楽しめるような経験をさせたいと思うのです。